

聖書：ヨシュア記1章10～18節

説教題：思い出しなさい

## 1 ヨシュアの迷いと決断

ヨシュアはモーセの後を継いでイスラエルのリーダーとなります。そのとき、イスラエルの集団がどこにいたのかを確認しておきます。イスラエルには二つの湖があります。北にガリラヤ湖、南には死海。ガリラヤ湖から死海に向かってヨルダン川が南北に流れています。ヨシュアたちはそのヨルダン川の東側の岸辺、地図で見れば川の右側にいます。ヨルダン川をはさんで向こう岸にカナンの地を間近に見て取ることができます。

川を渡れば約束の地カナンです。でもヨシュアは迷います。四十年前のある出来事を思い出します。あのとき、カナンを目の前にしていながら、あそこにはとてつもなく強い人たちが住んでいるとの情報がはいりました。それを聞いた人々は怖じ気づいてしまいます。ヨシュアは「大丈夫だから行きましょう」と懸命に説得を試みます。ところが、かえって人々の怒りの火に油を注ぐことになり、ヨシュアは殺されかけてしまったのです。幸い、モーセが間に入ってくれたので、何とか助かりはしました。けれどもこのことがきっかけで、イスラエルは四十年間荒野をさまようことになりました。

それが今、あのときと同じような状況になりました。神に従い、カナンの地には入れるか。それとも神に逆らい、また四十年の試練をくぐるのか。すべてヨシュアの肩に責任がのしかかってきます。

神はそのようなヨシュアの心を知ってく

ださり、このように励まします。「強くあれ、雄々しくあれ。恐れはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」

これを聞き、ヨシュアはカナンの地に入る決断を下します。今日は、このときヨシュアが語ったことばにどんな意味があったのか。その事を考えていきます。

## 2 ルベン人、ガド人、マナセの半部族

14節を読みます。「あなたがたの妻子と家畜とは、モーセがあなたがたに与えたヨルダン川のこちら側に、とどまらなければならない。しかし、あなたがたのうちの勇士は、みな編隊を組んで、あなたがたの同族よりも先に渡って、彼らを助けなければならない。」

このように言われたのは、ルベン人、ガド人、マナセの半部族と呼ばれる人たちです。あなたがたは妻子と家畜を川のこちら側に残し、力のある者たちが武装して先に川を渡りなさい。その人たちがまずカナンに住んでいる人たちと戦いなさい。言っている内容はなんとなく理解できます。しかしわからないことがあります。どうしてルベン人、ガド人、マナセの半部族だったのでしょうか。ご存じのように、イスラエルは十二部族で構成されています。そのなかから、なぜかこの三つの部族だけが選ばれ、先陣を切って戦いに赴くように言われたのか。

命令を受けた人たちの応答はこうです。

「あなたが私たちに命じたことは、何でも行

います。また、あなたが遭わす所、どこへでもまいります。」なんだか妙に素直すぎると思わないでしょうか。

そして 15 節を読んでも疑問が湧きます。

「主が、あなたがたと同様、あなたがたの同族にも安住の地を与え、彼らもまた、あなたがたの神、主が与えようとしておられる地を所有するようになったなら、あなたがたは、主のしもべモーセがあなたがたに与えたヨルダン川のこちら側、日の上の方にある、あなたがたの所有地に帰って、それを所有することができる。」

わかりやすく言い換えればこうです。残りの九つの部族がカナンの地に入ることができるよう、あなたがたがまず先に戦いなさい。九つの部族が無事に自分たちの土地にたどり着くことができたなら、そこで初めてルベン、ガド、マナセの半部族は川をもう一度渡りこちらに戻ってきなさい。ヨルダン川の東側があなたがたの所有地になる。そう言っています。どうして、彼らはヨルダン川のこちら側に戻るのでしょうか。なぜカナンの地に入らないのでしょうか。

### 3 思い出しなさい

#### (1) 自分勝手な願い

実は一つの理由があります。話は少しさかのぼります。モーセがまだ指導者として働いていたときです。ルベン族とガド族は多くの家畜を持っていました。家畜を養うためにはそれに適した土地が必要です。いつもその事で苦労していました。それが、ヨルダン川の東側に移動してきてみると、そこが絶好の牧草地であることがわかったのです。早速、彼らはモーセにこの土地を与えて欲しいと願います。モーセはこれを聞き怒ります。とい

うのは、ルベンとガドは、神が約束された地に入りたくないと言っているのと同じだったからです。神が約束されたカナンの地などより、いま目の前に広がる豊かな牧草地が非常に魅力的に見えてしまいました。彼らは神に対してもう一度罪を犯す一步手前まで行きました。

さてこの話の結末はどうなったのでしょうか。申命記 3 章 18 節にあります。モーセはルベン、ガド、マナセの半部族にこう言っていたのです。「あなたがたの神、主は、あなたがたがこの地を所有するように、あなたがたに与えられた。しかし、勇士たちはみな武装して、同族、イスラエル人の先頭に立って渡って行かなければならない。」

正直に言えば、私は今回このメッセージを準備するにあたりこれを読み驚きました。ルベンもガドも神の計画を無視するようなことを平然と言ったのです。ところがあんなに怒っていたモーセが、ルベンとガドの提案を受け入れているのです。それも消極的な態度で認めたわけではありません。「あなたがたの神、主は、あなたがたにこの地を所有するように、あなたがたに与えられた。」ヨルダン川の東側の地域をルベン、ガド、そしてマナセの半部族が所有することは、神の御旨であるとまでモーセは言っています。

#### (2) 弱さを益としてくださる神

いったい何が起きたのでしょうか。詳しいことは聖書に書かれていません。ただ言えることは、なぜか神は彼らの願いを聞き入れたということです。最初の約束にはなかったことなのに、神の約束と同じ扱いに組み入れてくれたということです。そしてもっと驚くべきことは、神はイスラエルの救いの計画を進

めていくために、この出来事を将来の備えとしてくださっていたという事実です。

どんな備えであったのでしょうか。今述べたように、三つの部族は先に神から所有地を与えられました。ところが、残りの九つの部族はまだ約束の地を与えられていません。こんなとき普通はどうするか。「まだいただいていない人たちはがんばってください。私たちはすでにいただいたので、お先に失礼します。」ところが聖書の世界ではそうはならない。むしろ、先に所有地をいただいた者であるからこそ、果たすべき責任があると言うのです。

モーセは命じました。「勇士たちはみな武装して、同族、イスラエル人の先頭に立ってヨルダン川を渡りなさい。」

ヨシュアが思い出しなさいと言ったのはこのモーセのことばでした。このことが大きな転機となります。このあとすぐにカナンに入る作業が開始されていきます。このように見てみると、ルベンとガドがヨルダン川の東側に残ることが、後にイスラエルが無事にカナンの地に入る大切な布石となっていたことがわかるでしょう。これが神の備えでした。

#### 4 律法を守り行え

まとめましょう。今、目の前に約束の地が見えています。ヨシュアは、「カナンに入れ」との命令を下さなければなりません。しかしその結果どうなるか、自信がありません。もし、ここでまた神に逆らうことになれば、振り出しに戻るようになってしまうのです。ヨシュアはこの四十年間、どれほどつらいところを歩んだかを知っています。二度と繰り返してはならない。ヨシュアはそのことを心配します。でもどうしたらよいのか。ヨシュア

は悩みました。

そんなとき、主がこう言われました。「ただ強く、雄々しくあって、私のしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行え。これを離れて右にも左にもそれはならない。それは、あなたがた行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。」(7節)

「モーセがあなたの命じたすべての律法を守り行え」とあります。これは何のことでしょう。「律法」というと、「罪を犯してはいけない」というようななにか抽象的なことが頭に浮かんできます。でも、ヨシュアに言われことはそのようなことよりも、もっと具体的なことだったのです。

ヨシュアがこれから進もうとする道は、すべてモーセが準備していました。モーセは、ルベン、ガド、マナセの半部族に対して前もってしっかりと釘を刺していました。所有地を先にいただいた以上、おまえたちが真っ先にヨルダン川を渡り、同族を助けなさい。それがここで言うモーセの律法にあたります。ヨシュアはモーセが準備していたことをそのまま実行するだけ。自分の考え悩んだりする必要はない。その事を忠実に行っていけば、やがてあなたは繁栄し、栄えることになる。そのような意味です。

「律法を守り行いなさい」と聞くと、不自由になるような感覚に襲われます。信じて救われたのだから、そんなものは必要ないのではないかと不満を言いたくなります。しかし、今日の箇所をよく読むと、「律法」ということばに対する印象がかなり変わります。

私たちが幸せに生きていくことができるように、すでに主は備えてくださっている。そのことを思い出しなさい。慌てる必要はない。すこし落ち着いて思い巡らしてみると、

神の備えが見えてくるのではないか。主の備えを思い出す。そうしたらどうなるのか。それまで、どこに続くのか不安に覚えた道が、少しずつまっすぐになります。まっすぐになれば先が見えます。その先に幸いがあることがやがて見えてきます。後ろをふり返れば、主があらかじめ備えてくださったことが見えてきます。

主の律法を守り行うとは、顔をしかめながら何かをがまんして苦しんでやることはありません。主の備えがどれほどすばらしいものであるのか味わい、先にあるもの主に尋ねながら歩いていきます。その道もひとりで歩むのではなく、主がどこまでもともにいて下さると約束しておられます。ヨシュアはこのことを信じて前に進んでいきます。